



Title	植物園内、バラ園、ハマナスの栽培管理について：花や果実を長期間観賞するための技術管理
Author(s)	荒井, 道夫
Description	技術部職員研修の研究・技術発表
Citation	北海道大学農学部技術部研究・技術報告, 1, 23-25
Issue Date	1994-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/35256
Type	departmental bulletin paper
File Information	1_p23-25.pdf



「植物園内、バラ園、ハマナスの栽培管理について」 “花や果実を長期間観賞するための技術管理”

附属植物園 荒井 道夫（環境・飼育系）

はじめに

当植物園は一般公開されており4月29日より11月3日までの開園期間におおよそ15万人の入場者がある。道外からの入園者は道内各地の海岸に野生するハマナスの花や果実を見たい人が非常に多い。しかし、ハマナスの花は普通の栽培では花が咲く期間がほぼ限定されている。時期はずれになると花を見ることができないことが多い。園内での例年の開花期間は6月2～3日から6月24～25日ころまでの約3週間で、その後は株の状態ではぼちぼち咲く程度である。ハマナスは剪定のやり方、肥培管理の工夫などで花の咲く期間を延ばすことが可能となるので栽培技術の工夫で花期をなるべく延ばして鑑賞できるようにしたい。花期を延ばすための栽培法方について記述する。

ハマナスの特性

ハマナスは北方系の野生のバラで、本州では茨木県、鳥取県以北、北海道の海岸や砂地に自生する。道内では網走、十勝、宗谷、根室、石狩、襟裳岬などに大群生地がある。自生地では高さ30～150cm、地下にのびるほふく枝で繁殖する。茎や幹には褐色で針状のとげが密生する。葉は2～4対の小葉、5～9枚からなり互生する。楕円形で濃緑色でつやがあり葉面の縮みが目立つ。花は5弁で普通は紅紫色で純白もある。

花径6～11cm、茎頂に1～3個咲き、香が強い。花は全開すると1日の寿命で花後に平たい球形で径25mmの果実が赤く熟す。果実は生食、ジャムなどに使用する。一個の実で30～60粒の種がとれる。品種改良の片親として利用されるほか、ハンザ（八重で四季咲き）、シロバナハマナス、八重シロバナハマナスなど園芸品種がある。

ハマナスは北海道の花に指定されている。さらに道内では平成5年8月31日現在以下の市町村の花にも指定されている。

石狩町、浜益村、江差町、奥尻町、瀬棚町、寿都町、天塩町、稚内市、枝幸町、紋別市、斜里町、興部町、雄武町、三石町、浦幌町、標津町など。

バラ園、ハマナスの植栽と樹形および主な作業管理

①バラ園の面積はおおよそ1,500㎡。ハマナスは池を中心に南側と北側に2列に植栽されている。合計31株あり、樹齢は15年内外、樹高は120～135cm、株張り（樹冠の直径）は120～130cmある。1株当たり太い幹では7～9本立ちで1本の太い幹から1～6本の枝がでている。以上が早春の株の姿である。

②例年3月中旬ころから枝折れ防止の冬囲いの除去を行なっている。雪解の直前に油粕、骨粉を混合して追肥を与える。それから傷んだ枝の剪定を行なう。春の本格的な剪定は4月上中旬に実施。3年生以上の古い枝（幹）は地際から切除する。1株で5～6本立となるよう枝（幹）の出方を見て細い枝は切除する。太い徒長枝は $\frac{1}{2}$ ～ $\frac{3}{4}$ 残して上部は切除する。太い枝から張出す細い枝は一部を残して切除し樹形を整える。一部変色している枝や傷がある枝はキャンカー（枝枯病）発病のおそれがあるので傷んだ部分は切除する。ハマナスの場合、ほふく枝から育ってきた細い枝は切除し古い幹や細い枝が多数

出ている幹は地際から切除する。あとは枝先を切りつめる程度で剪定はやめている。バラの芽出しは4月20日～23日ころで新芽の出方を見て、さらに枝の切り戻しを行う。同時に芽かきを行い株当りの新芽の数を調整する。4月中下旬に追肥（化成肥料）を与える。台木からの芽吹きもあるのでよく見回って見つけたら直ちに切除する。新芽の生育状態を見て5月上旬ころに硫酸加里を追肥する。アブラムシが発生するが加里肥料が効いてくると被害もそれ程心配ないので発生が目立つ株以外薬剤散布はしていない。5月中旬ころになるとハマキムシが発生してくるので捕殺している。5月下旬頃になると新梢にうどんこ病の病徴が現れてくる株がある。品種によって発病に大きな違いがある。病徴が目立つ新梢は切除している。堅く育てるよう施肥に注意して農薬散布は行っていない。気象条件が順調な場合6月上旬にハマナスの1番花が咲き始めて約3週間次々に花が咲く。四季咲性のブッシュローズは6月15日ころから咲き始める。地温の上昇を抑えることと黒星病（ブラックスポット）の発病抑制のため刈芝を地表面に敷き詰める（マルチングの実施）。追肥と除草は定期的に行う。

ハマナスは実つきが非常によく、花を咲かせっぱなしで放置すると全ての花に果実ができる。8月には赤く色づき成熟する。実つきがよいため、結実すると芽吹きが止まり花が咲かなくなる。肥料を十分与えると徒長枝の発生もあるので、育ちきると茎頂に花が咲くが肥料を与えないと徒長枝の発生も少なく開花期間が限定される。ブッシュローズは終花摘み、花が咲いた枝の剪定、花が咲かなかった新茎の剪定、徒長枝の剪定など11月まで作業が続く。

開花期間を延ばすための栽培管理実験

中央のスイレン池（昭和9年設置）をはさんで南北に2列に植えられたハマナスを基に剪定のやり方、施肥の量と回数、終花摘みで結実を防ぐなど、組合せの管理を実施して、株の生育状態、花つき、開花時期と期間の実態を調査した。本格的な栽培実験は平成5年度に行った。

池の南側に東西2列に植栽されている2つのグループに区分し、西側は細い枝やほふく枝から伸びた徒長枝など不要な枝を地際から切除し、太い幹は無剪定、花は咲きっ放して放置、結実させたままの自然状態で管理した。東側の太い幹は地上70cmですべて剪定し、その後育ってきた新梢はそのまま生長させた。花が咲いたあと直ちに切除して果実をつけないよう管理した。肥料はブッシュローズなみに追肥で与え肥培に努力した。

①西側無剪定の株の生育開花状態（入口の1株で比較）

太い幹は9本立の株、さらに各枝に脇枝が張り出した樹形が発芽前の姿。4月中旬に芽吹き5月下旬に茎頂に蕾が現われ6月2日に1番花が開花し、中旬には花の盛りとなった。6月17日現在すでに果実の肥大が目立つ新梢がある。樹高は150cm、株張りは150cm。新梢の長さは10～15cmと短く本数が非常に多い。1本の太い幹で芽吹いて育った新梢は80～100本の内、花が咲いたものは50～60本ぐらいで1株で花数は600～800になる。新梢の先に1～3個の花が咲くが枝数が多くなり過ぎると花芽がつかない枝も相当数でる。肥料を十分与えている場合細い枝が枯れることは少ないが、不足すると枝枯れが目立ってくる。さらにカイガラムシの発生も多くなる。結実させるとその枝は翌年枯れることが多い。

②東側剪定を行った株の生育開花状態

太い幹は下部70cm残して上部を剪定、剪定した枝の長さは50cm内外、細い下枝は切除した。上部の芽を切除した関係で芽出しの時期が遅れ4月下旬となった。幹の上部から

3～4本の新梢が伸び、ほぼ剪定前の高さになった。最上部から育った芽は50cm前後伸び、それより下から育った芽は60cm・70cmと下部からでた芽ほど長く伸びていた。6月18日頃に初花が咲いたので無剪定の株より2週間以上開花が遅れた。花がしおれてきたら直ちに切除して結実させないよう管理して、脇芽を吹かせ2番花を咲かせた。脇芽の伸長を促すため、化成肥料を与え肥培した。脇芽は1本の花枝から4～6本伸長し内3～4本に蕾がつき開花した。さらに、幹から遅れて伸びてきたシュート（徒長枝）にも花が咲き出した株もあった。開花最盛期は7月初旬でその後も花は咲き続けた。剪定した株の開花総数は1株当たり500内外であった。無剪定と比較すると枝数が少ないことが開花数の減となった。樹形では高さ樹冠の大きさは無剪定の株とそれ程変わらず花や葉の大きさ、地際から発生したシュート（徒長枝）の数は剪定した株で多かった。花は10月上旬の時期で2～3輪咲いており、蕾も数個ついていた。ハマナスは秋に葉が黄色に色づくがその時期に果実をつけた株とつけない株では大幅に違いがでた。紅葉の始めに結実した株は10月11日、つけない株は20日となった。

結果とまとめ

ハマナスの樹齢、及び株ごとの生育状態を見ると樹勢が最盛期と思われた。列植の場合は、剪定する列と無剪定に区分けして隔年ごとに剪定するようにして株の樹勢を維持するように管理すると開花期が長く鑑賞に都合がよい。毎年全株同じような剪定は当園では適当ではないので避けるべきと思う。剪定する株と無剪定の組合せの管理がよい。樹高を低くしたい場合は太い幹の間引き剪定を行い残した幹を倒すように曲げて新芽を吹かせるように仕立てると開花が早く花つきも多くなる。古い幹の間引き剪定は毎年行なう必要がある。古い幹をそのまま残しておくとカイガラムシの付着、虫えいをつくる害虫（アブラムシ科、タマバチ科）の加害が目立ってくる。さらに花が小さくなり、枝枯れも発生するので3～4年生以上の枝は地際から切除する。剪定は枝先を多少切り詰める程度に浅くすると芽吹きが早くなる。強く、短く残して切り詰めると芽吹きが遅くなる。幹の数と枝張りの状態を考慮して剪定する配慮が大切と思う。春の剪定はそれでよいが、ハマナスは日当たりと風通しを好むので1番花が咲いたあと幹の間引き剪定を行う必要がある。芽吹きが多くても茎頂に花芽がつかない枝も相当出る。施肥が少ない場合、特に目立つので蕾がつかなかった新梢は切除することが大切。ハマナスは砂地に自生する植物だが、肥沃な土壌を好むので肥料は十分与えて育てると芽吹きがよくなり花つきも多くなる。肥料は加里成分が窒素成分よりやや多めになるよう配慮して与えると堅く育って花つきは多くなる。芽吹きが早いので根雪が消える前に残雪の上から油粕、骨粉を同量混合して㎡当たり200g内外与え、芽吹き前に速効性の化成肥料を与えるようにする。そして月1回の間隔で硫酸加里を10月まで与えるとよい。1番花が咲いたあとハイポネックス微粉1,000倍液の追肥を4～5日間隔で与えると2番花のつきはさらに多くなると思われる。実つきは大変よいので結実させる株を決めて2～3年間隔で結実させる。すべての株に結実させないよう配慮すべきと思う。開花期間の延長の目処はついたので今後さらに技術の向上を計り開花数の増加に努力したい。

参考文献

- 1) 改訂みどりの環境づくりの手引 社団法人北海道国土緑化推進委員会 88p
- 2) 資源植物事典 北隆館 1949年発行 612p
- 3) 日本植物誌 大井次三郎 1965年発行 761p